大島正徳の生涯と思想

菊川忠夫

昭和五十八年九月二十九日受理

【要旨】 本稿は大島正徳研究のいわば総論序説であるが、特に次の二点を主軸にしている。
(一)、大島の生涯を社会史的（学界の動向を含む）脈絡において捉えること。
(二)、大島の主要な研究業績である経験論（実在論を含む）の特色を批判的に分析すること。

序

大島正徳（まさのり）（明治十三年――昭和二十二年）はいまや〝忘れられた思想家〟になろうとしている。数々の学問的業績を残し、内外ともに多彩な活動を行った大島正徳の名も、いまは六十歳以上の哲学者の脳裡に僅かに刻まれているだけのものになろうとしている。このことは、昭和五十六年に故山田英世氏（当時筑波大学教授）を編者とし、筆者らが協力して、『大島正徳著作集』、またはその『選集』をまとめる企画を若干の出版社と交渉した際に、最も露骨に表面化した。どの出版社も異口同音に、「もう十年、せめて七、八年くらい前だったら可能であった」と言うのである。そしてその主要な理由は、「今となっては、ほんの一握りの老学者だけに知名度があり、かつ現代哲学の主要な関心事が他の方向に向ったために、せっかくの企画も、リスクが余りに大き過ぎて到底お引き受けしかねる」（S社）ということであった。

大島正徳の思想の成り立ちについては、様々な角度から考察することが出来る。第一に、明治以降の近代日本精神史という背景から述べることが出来る。第二に、ウェイトをずらして、これを社会的思想史という観点から論ずることが出来る。第三に、明治維新以来、西欧の思想（大島の場合は英米の思想）が日本に移植され受容されていった過程、という拠点に立って考えていくことが出来る。第四に、大島が国際的に活躍した思想家だったという事実をふまえ、いっそう広い視野に立って、世界の精神史という基盤から見ていくことも可能であろう。第五に、今述べたこととは逆の方向から、つまり大島正徳という個人の特殊な経験の内から、いわば〈内的精神史〉として、これを取り上げることも出来よう。

ただこの小論は〝総論序説〟として、以上の観点のどれにも傾斜することなく、むしろ立体的に、それらの視点からする重要な素材を掲げてみることにしたい。

(一)　思想の形成期

大島正徳は明治十三年、大島正義（まさよし）・マキの長男として、現在の神奈川県海老名市（当時は高座郡海老名村）で生まれた。父の正義は明治の十年代に自由民権運動にたずさわり、いわゆる私擬憲法草案の検討を進めた自由主義者であった。（但し自由民権運動の波が鎮静化した後は、専ら地元で蠶種業を経営したという）そして長男正徳の教育についても終始一貫して自由主義の立場を貫いた。（正徳もまた、その子供の教育については同様の立場をとったという）

正徳（以下可能な限り大島と記す）の少年時代（明治二十年前後）は未だ学制がととのわず、従って中等教育以上を受けようとする者は、先ず地方都市で開設されていた塾に通う必要があった。大島は父のすすめで、小笠原東陽が指導する藤沢市の耕余塾で基礎的な学習を身につけた。ちなみにこの耕余塾は、父の正義はもちろん、後の首相吉田茂らも学んだ由緒ある塾であったという。

その後、クラーク博士で有名な札幌農学校出身の叔父大島正健のすすめにより、クリスチャン新島襄が開設した京都の同志社中学に学び、再び東京に帰って、第一高等学校文科から東京帝国大学文科大学哲学科へ入学した。ところで、大島が学生として帝大に在学した、明治三十四年から同三十七年にかけての帝大を中心とする思想的情勢は、色々な意味で特筆に値いするであろう。先ず、文科大学長井上哲次郎自らが哲学・哲学史第一講座を兼任し、次に心理学・論理学の第一講座を元良勇次郎教授、同じく第二講座を中島力造教授、社会学講座を建部遯吾教授、それに加藤弘之門下の講師数名を擁していた。思想史的に見るなら、明治初期のイギリス・フランス中心の啓蒙哲学から体制思想としてのドイツ哲学へと、日本の哲学界が次第に推移していく過程であったと言えよう。げんに大島が東京帝大に在学していた明治三十五年の十月にかの「哲学館事件」が起っている。*

*（注）哲学館（今の東洋大学の前身。当時の館長は井上円了）の卒業試験（中学校・師範学校教員検定認可の特典があった）の倫理学の設問に端を発した哲学館講師中島徳蔵対文部省視学官の論争。当時この哲学館では、英人ムュアヘッドの『倫理学原論』(J.H. Muirhead, The Elements of Ethics,1892)を教科書に使用していたが、中島は「動機善にして悪なる行為ありや」という設問を課し、天皇制や国権主義にとらわれない解答を期待したが、このことが視学官の不興をかい、たんに視学官対中島の対立のみならず、文部省対哲学館の対立となり、文部省の学問弾圧と学問の自由を守る陣営との厳しい闘争にまで拡がった。この時、東京朝日新聞、毎日新聞、中国民報などの社説、および慶応義塾、早稲田などの各大学の学報は、こぞって中島徳蔵講師を弁護する論説を掲げた。また浮田和民らの「丁酉（ていゆう）倫理会」の学者は「ムヒの動機説を教育上危機と認めず」と反駁した。これに対し東京帝大の「哲学雑誌」を中心とする「哲学会」（明治十七年創設）は大体において黙殺する態度を示した。特に文科大学長井上哲次郎は、雑誌「太陽」などに論説を寄せ、文部省にくみする姿勢を示している。（例えば論文「動機と結果論」）

哲学館事件そのものは、これを社会史的脈絡で捉えるなら、日露戦争を翌々年に控えて、山県（有朋）一派が、国内の輿論を国権主義に

統率しようとした布石であったとみられるが、大体この時期を境として、比較的に自由主義的であった文科大学も、いまや「帝国の大学」として、「国家ノ須要ニ応スル人材」の養育を目的とする方向に従うのである。そして哲学科内部では、カントやヘーゲルを中心とする体制思想としてのドイツ哲学が、完全に主流派をなすのである。英米哲学を専攻した大島が、東京帝大の「哲学会」及びそれの機関誌「哲学雑誌」では、次第に主流派からはずされ、専ら自由主義的な「内外教育評論」*などに論陣を張った根拠は、この辺の諸事情によるものであろう。

*（注）「内外教育評論」は明治四十年に創刊され、はじめジャーナリストの木山熊次郎が主筆であったが、明治四十四年に木山の死亡に伴い、学友の大島が主筆となった。大島は千駄木の自宅の一室を編集室とし、助手を使って発行を続けた。

さて大島は、日露戦争の開戦の年である明治三十七年に東京帝大を卒業、その後明治四十二年まで研究生として同研究室に留まった。この大島の研究生時代は、各県の中学校に、いわゆる〝学校騒動〟が持ち上った時期である。（例えば夏目漱石の「坊っちゃん」のテーマの一つになっている）大島はこれを黙視できず、明治四十一年の三月、前述の「内外教育評論」に「学校騒動について」という論説を寄せた。七十五年前に書かれたこの論説は、最近の〝荒れる中学校〟の問題と比較して、大変興味深い。先ず大島は学校騒動を規定して、これは「一揆の類」であり、「生徒の非校則的共同動作」であるとし、具体的に教員の侮辱、同盟休校、器具などの破損をあげている。そして学校教育の本義から言って、「いづこに最も多く責任を問はなければならぬかといふに、生徒よりも教員に、教員よりも校長にあり」と結論している。また問題点として、学校の内部に「一致和合」があったかという反省がないとし、また起ってからのこの騒動に対する處置解決の「拙速良否」にも重大な責任があることを指摘している。更に若き大島は、学校騒動を社会心理学の課題でもあると考え、次のような分析をする：第一に、生徒側は「正義の挙と思ふてをる」が、これは彼らを「分離」せしめて、「雷同精神」を静め、説得する以外はない。第二に、「多血性」とか「客気心」の「放恣なる発露」に対しては、「体力以上に学力や品行方正を尊敬する」ような校風をつくる必要がある。また重要な問題点として、〈理想的に考へられたる生徒の行動〉、〈理想的に考へられたる教員の性向〉及び〈理想的に考へられたる校長の人物〉の三要素の間に、「かなはぬ所があるかぎりは……騒動の種子ともなり得る」ことを警告している。だが要は、「生徒が学校を身の内と自然に心得る」ことであり、この方向で学校づくりをすることこそ、騒動を未然に防ぐ道である、と結んでいる。

さて大島のこの論説で気付くことは、大島が既に、調和のとれた批判の眼を具えていたということであろう。即ち一方で当時の学校教育のあり方を強く批判し、他方で生徒の「放恣」を厳しく戒めているわけである。「昔の学校騒動の張本人には今日有為の人材もある」が、当時の生徒の動きは、一部勢力家の「自我心の早熟」であり、それに「雷

同精神」、つまり「遊惰を望む心」や「年長勢力家の腕力を恐れたり休業を欲する心」がからんでいるに過ぎないという。ひたすら秀才コースを辿った研究生大島としては、旧制中学の〝落ちこぼれ〟の問題はたんに生徒側の「遊惰」であり、落第を出す教育体制そのものの構造分析には及んでいない。

後に大島は『理想』（六十五号）に「我が哲学を語る」という一文を掲げているが、これによると、若き大島が主力をつくしたのは、一つはロック、ヒューム以下の英米経験派の哲学であり、もう一つは、わが国における実践倫理学の改造であったという。（本稿の㈢・㈣を参照）明治四十三年、経験論哲学についての研究が一段落した大島は、こうして本格的に丁酉倫理学会およびその読書会で活躍を始めた。*

*（注）丁酉倫理会は、当時の日本における倫理学者や哲学者および在野の学者・教育者から成る会で、機関誌として月刊「丁酉倫理講演集」を公刊していた。そしてその定期記念講演会には千人以上の聴衆を集めていたという。また読書会の方は、主に中島力造が中心となって、西欧の新著を広く解説していた。（「泰西新著梗概」参照）若き大島はその有力な一員として、隔月に開かれる研究会で活躍し、理論的・実際的問題と取り組んだ。

既に述べたように、大島は明治末から「内外教育評論」に毎回のように寄稿して一家をなすようになる。その中で特に若き大島の哲学的立場が明確に打ち出されているものは、明治四十三年の第十二号に寄稿した「倫理学界の現況」という報告であろう。この報告で大島は、自己の立場に最も近い学者として、当時人格主義を掲げていた吉田静致をあげている。吉田の主張は自我と良心とを出発点とするものであるが、その場合の良心とは、「具体的良心であり、主観にして同時に客観的意味を有し、個人的にして同時に社会的」なものであった。そしてこのような「具体的良心の判断に基づて自我の実現を為し、然も其れが他我の完成、社会の調和を致す。」――大島はこのような解説をしている。次いで大島は、中島力造・中島徳蔵の二人をあげる。当時の学界の常識では、何といっても井上哲次郎とか加藤弘之とかいった〝元老格〟の思想の解説から始まるのが常であったが、大島は敢えて禁を破って新鋭の両中島を有力な思想家とし、〝元老〟に先立って紹介している。つまり当時の大島の哲学的立場がどの辺にあったかが露骨に表れている。中島力造はT・H・グリーンやシジック、テーラーらの日本への紹介者として著名であり、調和的な自我実現説を唱えていた。中島徳蔵は前述の如く、「哲学館事件」の張本人であり、その後はファイトの「倫理学原論」などを批判的に解釈していたが、大島はこれに触れて「実際的に適確に説いている」とし「個人主義の尤も純化（レファインド）したもの」と評している。

さて思想史的に概観して、明治後半に行われた思想界の大論争の一つは、加藤弘之対井上哲次郎の対立であった。（文献的には井上の『倫理学と宗教』に対し、加藤は『自然と倫理』で対抗した）言うまでもなく加藤は、明治十四年以来十二年間にわたって東京大学綜理・総長をつとめた元老であり、明治十五年頃まで、いわゆる天賦人権論を展開していたが、

モールスやフェノロサらによってダーウィンの進化論が紹介されるや、自説を変えて初期の三部作を絶版にし、〝人権新論〟に転向する。ただ加藤にあっては、そのダーウィニズムは功利主義と接合されて居り、その功利主義も極めて狭隘なものであった。彼はいまや国家を生物と同じ有機体と見なし、われわれ複細胞たる者が国家のために尽すのは、即ちわれわれの利己的根本動向を完成する所以であって、それがその固有性であると説く。つまり加藤は唯物論、一元論、無神論であり、しかも国家的功利主義の立場に立っていたわけである。これに対し井上の方は精神主義であり、「一種の理想主義的大我主義と云ふ可きもの」であって「既成仏耶二教は不適当であるから……今後は倫理教でなければならず……東西思想の融合を計る」ことを目的とした。

ところで大島はこの論争の何れにも荷担しなかった。また大島のよき協力者であった淀野耀淳も、「加藤博士の進化を以て哲学の唯一の究極的の原理のように説かるゝに反し、井上博士は進化は哲学上無用な原理ではないが、しかし根本的でない、他の原理を予想して始て成立するものであると云ふ」（十二号）と極めて簡潔に要約している。二人の間の論争はこの時期に華々しく展開され、井上の論説に対して加藤は毎回の如くに反駁していたが、大島のさめた眼からするなら、結局両人とも国家主義・国憲主義という大枠では奇妙に一致して居り、ともにその面からの批判を免れ得ない対象であった。そして大島のこの観点は、今日からすれば、大局的には正しかったと言うべきであろう。*

*（注）これを社会史的に整理すると、二人の角逐は学問的路線の対立というよりも次のような政治的路線の対立であったと見なされるであろう：
加藤＝伊藤（博文）＝政友会路線＝啓蒙主義的国家主義
井上・山川（総長）＝山県（有朋）・元老院路線＝反啓蒙国家至上主義
但し加藤（弘）も井上（哲）も、ともに折衷的であった。

さて大島は上掲の論文で、明治末期の日本思想界の現状について、次のような批判を展開する：「現今の倫理学は所謂翻訳倫理学であって……血と肉とを帯びて居ない……実際的の訓言としては忠孝の説が教育を動かして居る……旧来の如く唯々善のみを研究せずに、更に悪は如何言ふ意味であるか、悪の成立するのは何故であるかを積極的に研究して……心理学的に将た社会学的に研究するのが可からうと思ふ。」この〈善の研究ではなく悪の研究をせよ〉という大島の主張は、西田幾多郎を念頭においたものと思われるが、後に西田哲学批判を展開した田辺元の主張と比較して興味深い。（晩年は人間の悪の深刻さを受けとめ〈懺悔道〉を主張）また〈総合的な研究をせよ〉という大島の学界批判は、彼が当時研究中であったロック、ミル、シジックらが何れも総合的な学者で、政治学・経済学・社会学・生物学などに精通した上で、多面的な活動を行ったことをふまえてなされたものと思われる。

（参考文献）

久保義三『天皇制国家の教育政策』（勁草書房）
宮川透『近代日本の哲学』（勁草書房）

(二) 実践倫理学の改造

大島は大正二年、東京帝国大学の講師に任ぜられ、同五年に助教授に昇格している。担当科目は英米の哲学であった。だが大島は、経験論の研究と同時に、いやむしろそれ以上に（少くとも大正期に大島が発表した文献の量で見る限り）実践倫理に深い関心を寄せ、その改造の必要を力説した。これを正確に言うなら大島の場合は、経験論の研究＝実践倫理の改造ということであったのであろう。つまり学術研究と実践活動との間に何の矛盾も不調和もあり得なかった。

実践倫理について大島が公表したおびただしい資料を整理するのに格好なものは、何と言ってもその初期の論文である。というのは大島の場合は生涯を通じて〝転向〟らしきものは見られず、後年の主張は何れも初期の主張の部分的変容ないしは漸進的発展と見られるからである。既に触れておいたように、明治四十四年に木山熊次郎が急死すると、大島はその後任者として月刊「内外教育評論」の主筆の地位についた。ちなみにこの雑誌の対象はどういう人達だったかと言うと、主として熱心な現場の教師であり、学者や学生の一部も含んでいたという。そのためテーマは多岐にわたり、① 現場の教育論、② 新思想の紹介、③ 各国の教育（思想）事情、④ 文検問題解説、⑤ 修身公民科の改造論……など、誠に多方面に及んでいる。大島は主筆として当然ながら、その巻頭に掲げる社説を執筆した。またこれと並行して、現場の教師たちを対象とする講演会を開き、新しい教育論や新思想の紹介と解説を行った。その中には、リードの「自然的社会的道徳学」とかウードリッチの教育論（プラグマティズム）なども含まれていた。

いったい大島は当時の日本教育界について、基本的にどのような視点に立っていたのであろうか？　大島が「評論」の社説（明治四十四年十二号）に掲げた「真向きの教育と背向きの教育」は、彼の基本的な姿勢を明らかにしている。大島が反対する「学校本位」の教育主義は、「……生徒が学校に居る時さへ監督を行き届けばよい……卒業後の人物如何を顧みない……。」「このような繁瑣なる規則励行は、却って生徒の個性を傷け、少年の特質を破壊し、却って未来の大人物を作る道にあらざる……。」これに対し大島自身の教育論を比喩的に極言するなら、「生徒が少し位騒いだり躍ったりいたずらをするが如き学校こそ、却って真に教育の要領を得てをる……」ということになる。

さて大島が主筆となった翌年の第二号に、彼は「中学校修身科教授要目を評す」という社説を掲げた。これは「中学校」という表題になっているが、師範学校や高等女学校などの要目も大体の主旨において大同小異であるので、「中学校」をもってそれらをも代表せしめたという。この社説で大島は、厳しく当時の国家主義道徳を批判している。先ず冒頭の箇所で「一言の讃辞をも十分に明言する能はざることを悲しむ」と言い、その理由として次の六項目を掲げている：「㈠ ……徳目の挙

示亦不当不備である。㈡ 狭義の道徳を説くこと（のみ）に急である……㈢ 余りに国家的で人格的基礎が乏い。㈣ 余りに歴史的（保守）にして新日本の意義に乏い。㈤ 勅語・詔書の取扱いが細かに過ぎてをる。㈥ 修身科に余りに重きを置き過ぎてをる。」

㈠については、字面の論旨は必ずしも明快ではない。ただ、文部省のやり方が「少年の何たるかを解せざるものの作為せる所である」と言い、「広く人間として所有する諸能を発揮せしむる点に留意せねばならぬ」と書いているところから凡そ見当がつく。

㈢については、「余りに国家的観念にのみ偏してをる」ことが却って「日本国民が人としての性質資格を貧弱ならしむる」と憂えている。つまり個人は、「日本国民たるの自覚」というよりも「人として考えらるべき所謂人格的存在」であることを、忘れてはならぬ。「人格的基礎なき国民、人格的修養なき国家道徳は、沙上、楼閣、機関車のない車輌である。……今日の強固なる国家的精神を蓄養せしめた偉人物は……人間としての自覚のなかったものはあるまい。人としての強き自覚に国家的精神が宿ることによってのみ、強健なる国家的精神を涵養せしむることを得るのである。」

㈣については、「改造発展よりは墨守保存の精神のみを存養する用意が殊に目に立つ」と言い、「新らしき日本たるの新自覚を示さぬ……歴史的東洋流の懐古的欠点を再びするもの」と断じている。また、「古き日本たるの自覚は、単に長所美点を誇ることで自己の短所欠点を自覚することでないならば、今後の新日本の発展を期する所以でない……〝自惚は痴人の楽園なり〟の類に洩れまい」と結んでいる。

㈤と㈥については、当時の文部省が指導する修身科教育に疑問を持つ多数の識者が、本音として（建前は別）実際に感じていたことであろう：「勅語及び詔書を細かに……文句を追ふて心機至らざる少年に会得せしめんとするは、枝を描いて幹を忘るの弊に陥る。」文部省は、「修身科さへ攻め立てれば国民の道徳的基礎は成立つと思ってをる」が「修身科に徳育の全責任を負はしむることが失当なると同時に、又学校教育にのみ国民の道徳的教養を任せるのは大失当である。」結局、「若し政治家となく実業家となく、上位にある先輩諸氏の公私の行動を道徳的に律せしむるなくば、いかなる玉条の要目も無効力である」と大島は警告している。

以上、明治四十五年の論文を長々と紹介したわけであるが、それは、以後数十年に及ぶ大島の実践活動の基調が、この時点で既に大体において形成されていると思われるからである。事実大島は、これらの論

点を整理拡充して、大正五年に処女評論集『世界心・国家心・個人心』（内外教育評論社）として公刊した。これは大島の単行本としては最初のもので、学識の高い、調和のとれた啓蒙的な評論となっている。大島は更に自説を発展させて、中等教育の教科書『公民道徳』（大正九年、至文堂）及びその解説書とも言える『自治公民の根本義』（大正十二年、至文堂）を世に問い、国権主義と自由主義との調和をはかった。ただこれらの労作は、現在では〝二流の仕事〟と見なされてほとんど顧みられていないが、彼が吉野作造らの大正デモクラシーの前進のために修身科の改造という一石を投じたことは、たとえそれが時勢がら〝体制内改良〟に過ぎなかったとは言え、決して過少評価すべきことではあるまい。

ところで大島の学問的業績は、英米の経験論の紹介およびその研究であるが、初期の研究の成果は大正十二年に公刊された『経験派の哲学』（至文堂）に収録されている。経験派の思想家のうち大島が特に力をいれて研究したものは、前期にあってはヒュームであり、後期にあってはデューイを中心とする現代の新思想であった。ふつう経験論（empiricism）の研究というとF・ベーコンやロックに重点をおき、最後にバークレイやヒュームに言及するというパターンが多いわけであるが、大島の場合は、ヒュームを重要な思想的源泉と見なして、その思想がその後どのように修正されていったかを見ていく、という方向を辿った。つまり大島は、近代末から現代の今日に至る英米哲学の総論という前人未踏の広大な領域に斬り込んでその流れを要領よく整理し、日本に紹介するという大事業を遂行したわけである。*

*（注）例えば次の一文は大島の学風を単的に知る上で甚だ興味深い
――「ヒュームに於いては稍々分析的な態度が多く見えているが、ジェームズに於いては出来るだけこれを具体的に、即ち分析せずにつかもうとする。……ラッセルの感覚与件説の如きは、ヒュームの単純印象論とほとんど同説であると見なしてよい……」（大島『ヒューム人性論』四十四頁）

㈢　経験論の研究

大正十四年九月、大島は東京帝大助教授を辞した。正確に言うと、一日だけ教授に任官した。いわゆる〝名誉昇格〟である。大島が帝大のポストを辞した事情の一端については、水木丘竜「万年助教授から一万円局長へ、大島正徳君」（『明治大正脱線教育者のゆくへ』（啓文社、昭和元年）収録）の中で触れられている。

第一に、東京帝国大学において（他大学でも事情は大同小異であるが）、明治末期から大正中期にかけ次第に新カント学派への傾斜と、いわゆる「講壇哲学」の成立をみたという事情がある。ドイツ西南学派の価値哲学に依拠してカント哲学を解説した桑木厳翼の『カントと現代の哲学』（大正六年）は、同じ新カント学派の立場からカント哲学を思想史的に紹介した朝永三十郎の『近世に於ける我の自覚史』（大正五年）とともに広く読まれ、わが国の哲学界の主流はほとんどドイツ哲学一

色となった観がある。従って、英米の哲学思想は傍流として参考程度に扱われたから、大島としては研究室にあって居心地が良かった筈はない。

第二に、当時、西田幾多郎・田辺元・高橋里見・務台理作・桑木厳翼……といったそうそうたる哲学者が、主としてドイツの学界と交流し、いずれも博士号を次々に取得していったのに対し、大島が専攻する分野はヒューム以降の英米現代哲学であったから、文学博士の取得は極めて困難であったと思われる。

第三に、前章で見たように、大島にはもともと実践道徳の改造という意欲があり、また教育制度の改革への提言があったという事情がある。（視学制度の改造など）

第四に、以上のことには大島の私的な事情が更にからんでくる。即ち関東大震災による実家（海老名村）の破壊があり、また父正義の没後に、大正後半の不況で蠶種業経営に生じた負債の問題がある――そしてこれらのことが大島をして、東京帝大の〝万年助教授〟から東京市の〝一万円局長〟（東京市長中村是公氏に招かれ初めは学務局長、のち教育局長）へと転身せしめたものと思われる。当時、年俸一万円というと大臣なみで、東京市の一般市民の家計は平均で年間一千円あまり、大学教授でもせいぜい二千円程度であったという。

東京市の役人として大島がどれだけの業績を残したかは、必らずしも明らかではない。恐らく個人の研究業績とは異なり、体制の厚い壁にはばまれて所期の目的を十分に果たし得なかったのではないかと思う。その証拠として、僅か三年で教育局長を退職し、（〝政治屋〟として軽蔑していた大久保留次郎新市長と意見が合わなかったという）普通選挙法による第一回の衆議院議員選挙（昭和三年）に郷里の神奈川県から〝理想選挙〟を標榜して立候補した。所属は、小党派の実業同志会であった。この時友人たちはこぞって反対したというが、恐らく大島の頭の中には、彼が尊敬し研究してきた英米経験派の巨匠たちの生き様が刻まれていたのかも知れない。*

（注）* ロックはウィリアム三世のブレインであり自由党の政治路線につながっていた。ベンタムはあらゆる分野での立法的提言を行い「哲学的急進派（フィロソフィカル・ラディカルズ）」とまで言われた。またJ・S・ミルは『代議政体論』や『自由論』で有名であるが、晩年は急進党から下院議員に当選し、一期つとめている。

昭和の初期における大島の活躍は多岐に及び複雑をきわめている。その主なものを拾ってみると、東京市会議員（一期）、帝国教育会専務理事、世界教育会議（英・米・比の各国で開催された）の日本代表や事務局長、世界教育団体聯合会アジア代表副会長……などである。しかもこれらの多忙を極める職務の間にも大島は、東大、一高、東京文理大、東洋大、日本女子大などで、哲学及び倫理学の講座を担当し、また日本の各地での講演会や評論活動を続けている。更に研究活動にいたっては驚嘆に値いするほど旺盛であり、後期（昭和期）に成しとげた研究業績は、東京帝大に籍があった前期（大正期）のそれをはるかにしのいでいる。即ち大島はこの多忙な時期にあって、大著『現代哲学概観』

（至文堂、昭和六年）、『近世英国哲学史』（三陽書院、昭和十年）および『現代実在論の研究』（至文堂、昭和十八年）の三部作の他に誠文堂『哲学講座』の第十三巻（英米現代哲学）を執筆している。更に『ヒューム　人生論』（岩波書店、昭和十年）とか『哲学概論』（至文堂、昭和十四年）とかいった教養書をも五点ほど公刊している。この最後のものは、要点をおさえていて分り易いところから、旧制大学（文科系）入試のための数少い参考書の一つとまで言われた。また『ヒューム』は岩波の大思想文庫の一冊ということもあって今日でもなお、若干の人たちの間で読まれている。ちなみに大島の著作のうち現在も公刊されているものは『哲学の話』（宝文館、初版は昭和八年）一冊だけである。

さてわれわれは、大島の経験論哲学研究の特色は何かという問題と取組むべき時期に至った。ところが大島の経験論研究は真に厖大であり、山ほどもある業績に圧倒されて、さながら迷路を行くような感じがしないわけでもない。そこで、大島が生前最も得意としたダイジェストの仕方――いわば樹を見ずに専ら森を見ていくという仕方を筆者自らが踏襲したならどういう風に要約できるか、を考えてみた。既に触れておいたように、大島の研究の焦点の一つはヒュームであり、大島はそのヒュームの立場がその後の哲学史を通じてどのように修正され組み替えられてきたかを問題にした。例えば昭和十年公刊の『近世英国哲学史』をひもとけば、このことは歴然たるものがある。この著書は「近世」と銘うってあるにも拘らず、専らヒューム以降の諸学派について講述されている。即ちそれは十八世紀以降の批評的英国哲学史ともいうべき体裁をなしている。そして〈ヒューム以降の哲学者はヒュームを超克したか〉、例えば〈ラッセルはヒュームをのり越えたか〉という問題設定の糸が見られるのである。大島はアングロサクソン系の文化の発展に、やや楽観的な信頼を寄せて居り、〈新しい後継者たちは何らかの意味で初期の巨匠たちの或る一面を改善している筈だ〉という漠然とした期待があったのではなかろうか。もしそうでなければ、大島が何故とりつかれたかのように、次々に新しい思想家の研究に向ったのかという理由が説明できない。

大島の『ヒューム人性論』の最後の箇所に次のような所感が述べられている。やや長いが重要なものと思われるのでそっくり引用してみよう――

昔の詩に、「春」を尋ねようとして、草鞋をはいて、寧日諸方を探りまはったが、遂にどこにも「春」を見出すことは出来なかった。然るに、たづねあぐんで家に還って来て見ると、枝頭春既に十分で、庭前に梅花の香しいのを見た、というのがあるが、ヒュームの学説は、そんなやうな説である。哲学史上、真理とか実在とかを遠く探すものがある。或は合理論的に或は実在論的に、即ち理論から理論へ遠く追求し、或は経験、観察の奥に何物かの実体を捉へようとする。しかし凡べてが無駄であった。皆失敗にをはっている。そこで近く手許の如実の世界に気をつければ、そこに直接に平明に真理が見出さ

れ、実在が捉へられる。それは即ち印象であり、観念である。それを見出す方法は即ち経験・観察である。真理は遠く探すに及ばない。道は近きにある、という考へである。詩客が、春を遠く尋ねて、これを見出さず、還り来って、却ってまのあたり、我が庭前の梅花に春を認めた如く、ヒュームは目前の印象・経験を根本として真理の「春」を認めたのである。そしてこゝから、その学説を展開して行ったのである。けれども、この「春」の花は随処に認められる花であっても、それは年々歳々相同じ花であるか否かは、彼は保証しない。たゞ同じ花だと想像し、或は信ずるだけである。こゝに、印象主義者であり、事実主義者であり、経験主義者である彼が、同時に懐疑主義者である、という面目がある。

(Leaving it to posterity to add the rest——Hume's epitaph)

(一五八—九頁)

以上長々と引用したのは、大島がヒュームの哲学を高度な常識人の思想として肯定的に要約して居り、経験論の大元のところに重要な現象学的問題があるかも知れない、という発想が見当らないからである。確かにヒュームは、大島の解説の如くに、世俗的仮想も哲学的仮説も、どちらも確たる根拠を持つものではなく、そこにはただ錯誤と虚偽を見うるだけで、理性と感性についての懐疑的疑念はわれわれが根治することの出来ない病気であるとした。そしてそこから逃れるには、無頓着と不注意に依存するという方法しかないとしている。更に自己の存在も「いかなる時にも知覚なしに自己自身を捉えることは出来ず、また知覚以外の何ものも見ることは出来ない」(Hume, A Treatise of Human Nature, Oxford, p.252) から、知覚とは別箇の自我の観念といったものはなく、また知覚を離れて自我の存在はない。自我は「様々な知覚の束ないし集合以外の何ものでもない」(ibid., p.253) と言っている。従ってわれわれはただ主観的にこれこれだと思いこんでいるに過ぎないのではないか、という懐疑になる。だが「われわれが思考をゆるめたとたんに自然の本性が現われて、以前の所信にわれわれを引き戻す」(ibid., p.214) とも言っている。ということは、日常的な立場が単に主観的な性癖に由来するというだけではない別の根拠を持っているからということになろう。そして大島はこの辺を十分に検討してみるべきであったと思う。

私見によれば、事物の存在が知覚によって知られるということは、事物の知覚が存在するものとして受けとられるということであるが、原初的な直接の経験においては、知覚するものとされるもの、主体と客体とが予め区別され、あるいは前提されているわけではない。ただ端的に知覚するということがあるだけである。従ってそのこと自体として見れば、それはいわば主客未分である。また一般に抵抗感覚が原初的な存在の知覚であるとされるが、抵抗感覚によって物が在ることが意識されるというだけではなく、同時に自我の存在も意識されるという相関関係にある。それは主客の同時成立である。それは抵抗するも

のに対する抵抗されるもの、作用に対する反作用の同時的存在という力学的関係にある。だがそうかといって、抵抗するものがある以上、抵抗されるものも存在しなければならないという推理によって、初めて自我の存在が定立されるのではない。原初的な主体と客体の存在の知覚は、推理以前の原初的信憑（Urglaube）である。抵抗の知覚そのものが、存在を原初的に直覚せしめ、自我の存在は他者とのかかわり合いにおいて原初的に直覚される。

この当時西田幾多郎は、一般の立場は主客の対立を自明のこととして〈考へられたもの〉から出発するが、自分は〈主客対立の成立つ立場そのもの〉から出発するのだ、ということを強調していた。そして、「此等の人々と私との根本的立場の相違は、自己から世界を考へるか、世界から自己を考へるかにあるのである……私の立場は……世界から自己を考へる……。」（『論文集第五』二〇〇頁）と言っているが、経験論をあくまで正しいとする大島が、このような立場に立つ西田と、徹底的に論争していたなら、極めて実り豊かな論戦になっていたのではないかと惜しまれる。

さて右のような記述を行うと、あたかも大島は英米の経験論や実在論のみを研究したかの如く響くであろうから、ここで若干の別の事実をつけ加えておかねばなるまい。昭和六年に公刊された『現代哲学概観』で大島は、英米に限らず独・仏・伊の現代思潮一般にも言及しており、観念論や生の哲学、現象学派などが網羅的に取り扱われている。しかもそれらのまとめ方は簡潔にして要を得て居り、大島が当代の真に啓蒙的な解説者の第一人者であったことが分る。ついでにこの書物をめぐる戦前のエピソードを一つだけ掲げておこう：大島はプラグマティズムの創始者としてCharles S.Peirce（1839-1914）をあげて解説しているが（一一八―九頁）、その際かれの名をピアースとして紹介した。そのため他のほとんどの解説書もそれに従い、ピアースという読み方が固定したという。そしてそれがパースという発音に訂正されたのは、戦後になってからであった。この話は、大島の不用意を物語るとうより、むしろ大島が戦前における英米哲学研究の第一人者であって、誰しも彼の記述に疑義をさしはさむことがなかったという事情を物語るものと言えるであろう。

㈣　結語にかえて

昭和五十六年の七月に日本女子大学の合同同窓会があり、筆者はこの機会を利用して、戦時中の大島の授業内容その他についてアンケート調査を行った。大島は昭和十五年から同十九年まで、同大学で倫理学・哲学の授業を担当している。ちょうど日本女子大では、その同窓会が中心となって、戦時下の学生生活を発掘し記録した『戦いの中の青春』（一九四五年卒業生編、勁草書房、昭和五十一年）がまとまり、当時のありのままの事実を保存しようという空気が高まっていたからであ

る。また当時、学徒出陣その他でろくに授業をうけられなかった他大学の卒業生に較べ、ここは昭和十九年の秋に至るまで比較的にまとまった形で講義が続けられた数少ない大学の一つであったからである。また女子大ということで、大島の「講義ノート」その他を今なお保存している者もあるのではないかと期待したからである。

紙面の関係でアンケートの内容やその結果の詳細は省略せざるを得ないが、要点のみを記しておこう。第一に、アンケートの結果はわれわれの予想に反していた。先ず回収率が極めて悪かったということ（3％未満）、次に「名前は覚えているが大島の授業の内容はほとんど覚えていない」（23名）といった解答が余りに多かったことである。第二に、大島の「講義ノート」を保存していた人は皆無であった。（保存しているかも知れないと答えた者も結局は見出せなかった。ただ教科書に当時の授業の具体的内容を示す書き込みがあり、それを資料として提示された方が一名あった）第三に、大島をかすかに覚えている人の場合でも主として外面的・形式的なことが大部分であったということである。即ち、「いつも背広姿で（国民服ではなくの意）貫録があり、教科書（『倫理学概論』や『思索の人生』）を使用してたんたんと授業を続けた」（五名）が一番多く、「〈哲学は常識を疑うことから出発するというのは間違いで、常識をよりよく修正していくことだ〉（大意）ということを繰り返し強調されたのを覚えている」（3名）、「人物や思想の羅列ではなく、テーマ別の授業で、時折新しい事例が紹介された」（2名）、「学生の（幼稚な）頭脳を軽蔑するようなところがあった」（2名）――以下略――しかもこれらの人々のすべてが「大島の〝時局批判〟の思い出はない」と答えている。

このうち「常識を修正していく」は大島の一貫した態度であり、「テーマ別」は大島が哲学および倫理学の授業を「思想を一層深化せしめる目的」で「思索を練磨する場」であると考えていたことと対応している。また「たんたんと授業をされた」というのは、戦争たけなわのこの時期にちょうど出版された大島の『現代実在論の研究』の記述態度とも一致している。*

*（注）この当時出版された書物の大部分は、序文その他で、戦時体制下の〝時局〟に一言、肯定的に言及するのが常であったが、大島は敢えてこれを言わず、たんたんと次のように述べている――「彼等（主としてアメリカの思想家）の根本思想を討究することは、真に彼等を内面的に知ることであり、これを他山の石として、我等の思索を練磨する資料とすることは、我が国本来の思想を一層深化せしめ向上せしめるゆえんであって、我が学界の水準を世界的に高からしめるに寄与するところがあるであろうと思う。」（序文）

右の調査を開始した時点では、筆者は大島の〝脱線教師〟としての諸面＝自由主義的・反時局的＝や精力的に雄弁をふるう姿を期待していたわけであるが、調査の結果の集約では、むしろ地味で重厚な学究肌の人間像が浮び上っているように思う。事実、大島の活躍の時期を前期（大正期）と後期（昭和期）とに分けてみると、啓蒙的・通俗的な評論活動はどちらかというと前期の方が多く、後期になるほど学術書が増加している、という珍しいパターンが見られる。ちなみに、戦

後いち早く『デモクラシーの基本概念』（至文堂、昭和二十一年）を著わし、六・三制教育の発足のためにその活躍が期待されながら癌を病み、絶筆となった大島の最後の論文も、「新実在論の研究」（東洋大学昭和二十三年「紀要」）という地味なものであった。また大島最後の単行本『落想録』（至文堂、昭和二十二年十月）は、短文集ではあるが、東西の諺を中心に最晩年の境地を語り、〈しみじみとした人生哲学書〉の趣きを呈している。

既に予定の紙面も盡きたので、最後に大島の生涯と思想について気がついたことを要約しておこう。

第一に、大島の哲学者としての生き方は、英米の進歩的自由主義者のいわば〝大物〟のそれと型を同じにしている。即ち幅の広い総合的な思想家として多方面に能力を発揮し、いわゆる〝象牙の塔〟の生活には満足できなかった。（ミル＝デューイ型）

第二に、大島の思想の展開は徹底的な漸進型であり、如何なる意味においても〝転向〟はあり得なかった。彼はその卓越した〝常識〟により、その後の日本と世界の動きを他の誰にもまして、割合に適格に予想し得た数少い思想家の一人であった。

第三に、ある意味で彼のスタイルは、極めて日本的である。即ち難解な事項のダイジェストが迅速で、手取り早く要点をつかんで紹介するという驚くべき自力を具えていた。（例えば『新思想の批判と主張』（至文堂、大正六年）を見よ）そしてそのような新思潮の解釈と紹介とを通じて己れ自身の哲学をも身につけていく、というスタイルであった。

第四に、彼は戦前では珍らしい自由国際派であったということが挙げられる。（例えば『世界の心を語る』（帝国教育会出版部、昭和十五年）を見よ）彼は語学力（会話力を含む）に秀いで、それも国際会議で活躍できる水準に達していた。しかもそれは留学なしの語学の修得として注目される。ちなみに大島の著作の中には英文で記されたものもある。（Masanori Ohshima, Japan from Within, Hokusei-do, 1940）これは長女優らの協力を得て完成したもので一般的な日本文化の紹介書となっている）

第五に、大島は、よい意味でも悪い意味でも、近代主義および大正デモクラシーをその基調においていた。即ち体制内改良（明治憲法の枠内での最大限の権利と自由）をもって己れの任務とし、国体（天皇制）そのもの、資本主義そのものを疑うことは少なかった。彼が戦時中に当局から弾圧されなかった所以である。また逆に彼が終戦後の数カ月間ＧＨＱから公職追放をうけた所以である。（帝国教育会の専務理事の地位にあったためと思われる）繰り返すなら、大島は、近代思想そのものとか近代科学そのものの根底に潜む重大な問題点を見究めることがなかった。この点がいわゆる〝独自な哲学〟を樹立した西田、田辺、高橋（里美）らと著しく相違するところで、そのために大島の思想に対する現代的関心を弱いものにしている。しかも大島は、英米の哲学者については多くの適切な批評を行ったが、同じ日本の国内で擡頭して

いた西田哲学、田辺哲学、高橋哲学、和辻倫理学……などについての批評を行うことを避けた。恐らく思考のパターンが余りにも違い過ぎたからであろう。

第六に、政治家としての大島には高い評価は与えられないであろうが、実践家として、また組織家（オルガナイザー）としてみた大島の評価以何という問題がある。既に何度も触れたように、大島は若い頃から「内外教育評論」の主筆として、また後に「丁酉倫理諸演集」の編集幹事として、更に短期間ではあったが「哲学青年」誌を企画し、主として現場の教育者や自由主義的な学究の徒の組織づくりに、或る程度成功したと見られる。また世界教育会議とか日本デューイ学会の提唱とか、彼の果した役割は決して少くないであろう。しかしそれらを、折から擡頭してきた超国家主義に対抗せしめるものに仕上げていくには至らなかった。このことは同じ東大の講壇にあって（但し経済学部）同じ英国の自由主義を専攻し、弾圧に抗してこれを呼びかけて、若い学徒から圧倒的な支持を集めていた河合栄次郎一派と彼が提携しなかったことに象徴されている。（専攻分野を異にする「天皇機関説問題」についてはこれを不問とするもやむを得ないであろう）第二次大戦下の大島は「現代実在論の研究」に没頭し、かつ帝国教育会の一員であるという立場上、時事的な評論を避けたから、当局の厳しい弾圧をうけることはなかった。しかしこのことが今日となって、却って彼の思想への関心を奪ってしまった、という風に言えるかも知れない。

とまれ、右の如き弱点にも拘らず、大島が戦前における自由主義の草分け的存在であり、大きな啓蒙的役割を果したということは、どんなに強調してもし過ぎることはあるまい。

最後に、大島が自己の研究生活の指針（基調）としたことについて、一言せねばならない。大島が英米型民主主義および西欧型諸科学一般に関し、肯定的・楽観的な期待を寄せていたことについては、既に述べた通りである。これに対し京都学派（西田・田辺ら）の思想は、これらの根底を探り、そこに重大な難点を見究めて、既に危機意識を強めていた。そのため後者は前者（大島）に較べ太平洋戦争に対し、よりいっそう複雑な対応を迫られ、戦後はその故にこそ多くの非難にさらされたわけである。その意味ではたしかに大島の方に〝先見の明〟があったと言えよう。（但し長期的展望においては事態はそう簡単ではない）また、普通は西田・田辺らの哲学をもって〈日本独自〉の思想と見做し、大島らは〈西欧的思想〉の紹介者とされるのであるが、筆者は必らずしもこの考え方に同調できない。むしろ大島の生き様の中に、日本型の一典型を見てとることが出来るように思う。遺稿となった最後の論文（前述）の中で大島は次のように言う：「我が国の文化生活の一特徴は海外の思想文化を摂収してこれを同化するにある」から、海外の思想研究は「我が学徒の義務でなければならない。」そしてそのような課題に立ち向った先人として、大島は明治の井上圓了（前述）を挙げる。井上は特にその晩年に蘊蓄を傾倒して『哲学新案』（明治四十

二年)を著わし、「西人未到の学域に先鞭を着けんと欲し……西人未発の所見なりと自ら信ずる所」を研究した。その学風は「欧米の……学説思想を摂収するに大膽であり包容的であった。」(前掲「新実在論の研究」五一頁)そしてこのことは、そっくり大島自身の学風とも一致する。つまり大島は井上(円)とともに「大膽にして包括的に広く世界の学説思想を摂収し、批判的に打って一丸としようという学的態度」を堅持した。ここには〈飛躍的な独創〉こそ見られないが、いわば〈改良的な独創〉が遍在している。そしてこの後者こそ、日本的な知恵であり、日本型のルーツに近いものではなかろうか。もちろん〈改良型〉であるからには、種々の難点や不備がなお残るであろう。だがそういうことは大した問題ではない：即ち、「哲学今後の修正は科学の進歩にまつべし」(井上)でよいのである。だからヒュームとともに：Leaving it to posterity to add the rest——

(完)

本稿は電気工学科教授大島正和および本学非常勤講師梅崎光生の両氏の御協力を得て菊川が要約したものである